

新国立競技場の聖火台に関する検討ワーキング・チーム（第 2 回）

議事次第

日時：平成 28 年 3 月 25 日（金）10:30～12:00

場所：中央合同庁舎 8 号館 6 階 623 会議室

1. 開 会

2. 議 題

- (1) 聖火台の設置等に関する考え方
- (2) 聖火台の設置に伴う課題等
- (3) 1964 年東京大会聖火台の保存場所の検討状況
- (4) その他

4. 配布資料

- 資料 1 東京 2020 大会 開会式に関して（組織委員会）
- 資料 2 新国立競技場の聖火台設置について（JPC）
- 資料 3 聖火台の設置場所に関する基本的考え方（課題の整理）
（JSC）
- 資料 4 炬火台（1964 年東京オリンピック聖火台）の保存場所の
検討状況（JSC）

【東京2020大会 開会式に関して】

- 開会式の制作に関する想定スケジュールは下記の通り。
 - ・ 大会の2～3年前に演出、制作に関する具体的活動を開始。
 - 制作チームの選定、活動開始
 - 演出家の選定
 - ・ 演出内容については、最終的にIOCの承認を得なければならない。
 - 演出内容詳細については半年～1年前の承認を想定

■ London2012大会スケジュール（参考）

- ・ 2010年春（約2年半前） 制作チームの選定、活動開始
- ・ 2010年夏（約2年前） 開会式演出家の選定

■ 聖火台設置について

一般的に、開閉会式時の聖火台の位置については自由度が高いが、競技期間中及び大会後の聖火台の位置については、競技場の設計との関係で検討が必要となる可能性がある。

① 開閉会式



② 競技期間中



③ レガシー

新国立競技場の聖火台設置について

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会
日本パラリンピック委員会

1 基本の考え方

- 1) 現在の基本設計の中で進める。
- 2) IOC の求める規則（条件）に合うことが求められる。
- 3) IPC の求める条件は IOC の規則に含まれる。
- 4) 組織委員会と IOC／IPC が同意する設置案に同意する。

聖火台の設置場所に関する基本的考え方（課題の整理）

○防災上の課題

消防関係法令上、聖火台は「炉」及び「裸火」として取り扱われると考えられ、原則として周囲に 5m 以上、上方 10m 以上の空間確保が必要となる。ただし、消防署長等が同等以上の安全性を確保することができると認めた場合等においては、これらの規定によらないこととできる可能性がある。

○運用上の課題

聖火台の設置場所により、「聖火台が見えない席」や「観客席からの競技観戦の見切れ席」が発生する。（一定の前提を置いた試算）

屋根の上部の場合	・ 相当数の観客席から聖火台が見えない蓋然性が高い。
スタジアム内部の場合	・ 観客席に設置する場合、一定程度の観客席が競技観戦の見切れ席となる蓋然性が高い。 ・ フィールドに設置する場合、全ての観客席から聖火台が見える。
スタジアム外の場合	・ 観客席から聖火台が見えない。 ・ 大会期間中にスタジアム外部から聖火台が見える。

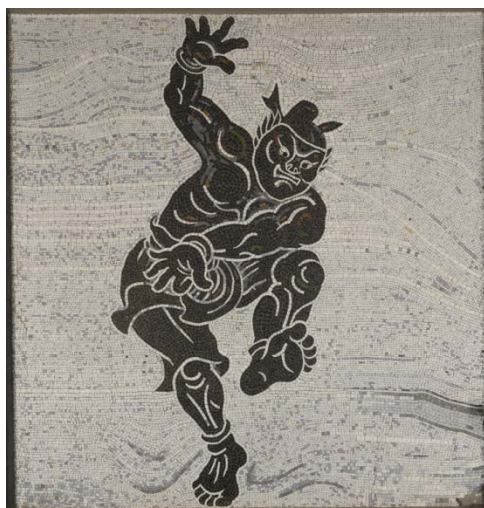
○技術上の課題

設置場所及び聖火台の形状等に応じ、構造的な検証（特に屋根に設置する場合には耐荷重や風荷重）、配管設置の検証等が必要となる。

炬火台(1964年東京オリンピック聖火台)の保存場所の検討状況

- 旧国立競技場敷地内に設置されていた、炬火台きよかだい(1964年東京オリンピック聖火台)、壁画等の記念作品、出陣学徒の碑等25作品については、昨年8月に関係閣僚会議が決定した「新国立競技場の整備計画」において、「最終的な保存場所をJSCは早急に検討し、決定すること。」とされたことを受け、JSCにおいて学識経験者等から成る「アドバイザー会議」を設けて、本年から検討を進めてきたところ。
- 炬火台の保存場所の検討に当たっては、「1964年東京大会の聖火台」として、2020年東京大会の主会場となる新国立競技場の建設後において、オリンピックレガシーとして有効活用することを前提としている(2020年東京大会でも聖火台として利用される場合、別途検討が必要との認識。)
- 具体的には、1964年東京大会のレガシーを分かり易く、シンボリックなものとするため、エリアとしてのまとまりを持たせることとし、敷地東側に旧国立競技場を象徴する3作品(炬火台、のみのすくね「野見宿禰」、のみのすくね「ギリシャの女神」の壁画)を配置することを検討中。

のみのすくね
「野見宿禰」



「ギリシャの女神」



旧国立競技場のメインスタンド上部に設置